

Title	古墳と上代文化, 高橋健自著
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.2, No.1 (1922. 11) ,p.136- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社會と交渉せしむるものは、博士の態度によつて反省すべきであらう。最近いさゝか新活動の機運のほのみゆるわが史學界が、本書によつて更にその活躍の刺戟を與へられたのは喜びにたへない。(松本芳夫)

古墳と上代文化

(高橋健自著)
國史講習會發行

本書は文化叢書第九編として刊行せられたのであるが著者高橋健自氏は帝室博物館歴史課の主任で先きに「考古學」「鏡と劔と玉」等の著書ありて考古學の權威である事は今更記す迄も無い。本書は第一章總説、第二章墳丘、第三章石槨及横穴、第四章石槨及甕棺、第五章餘論の五章より成り是を更に四十八節に細別し論述せられ、猶四十餘種の挿圖がある。次に自分の一讀して參考となつた處を二三紹介す事にする。

第一章の(一)古墳の意義及學術的價値に於て「考古學上の古墳は高く著しい墳丘を以て造營された土代の墳墓に對してのみ用ひられるのであつて、墳丘があつてもそれが餘り目立たなく、葬制が佛教によつて營まるやうになつてからの墳墓は古墳と呼ばないのである。であるから我が國に於ける古墳の時代は平城宮都以前火葬がまだ社會の上流に行はれなかつた期間を指すべきである。」と古墳の意義並に其の時代に付きて説明せられ、次に「文獻的史料が甚だ貧弱なる時代(原史時代)に當つて、當時を考察すべき好個の資料は實に古墳にあることを忘れてはならぬ。記紀等の記載

は何といつても後に出來たものであるが、古墳はその時代に於て築かれた重んずべき記念物の一で、それから發見された幾多の遺物は正確に當時を物語る最有力なる物件である。考古學者が不文の記録として古墳を重んずるのは即ちこの故である。我が上代文化は畢竟この不文の記録に立脚して研究されるのでなければ確實性を有し得ないのである。」と古墳の學術的價値につきて論述せられて居る。

第二章墳丘(五)埴輪に於て、有名なる垂仁天皇の埴輪起原傳説につきて「從者生理傳説(日本書記)は人垣設立(古事記)を具體化した臆説で、人垣を立てたとは埴輪土偶を立て列べたことであらう。換言すれば日本書記の記載は陵墓に立つて居る土偶土馬の類を見て、土師部の輩がその祖先と仰ぐ野見宿禰の徳を讃すべくいひ出された俗傳と思はれる。」と猶上古の殉死につき「吾輩は埴輪と殉死とを引離して考察するの妥當なるを信するのである」と云はれて居る。又埴輪配立の目的につきては實用と裝飾との兩意義の存在を認め、圓筒から進化して土偶の類が出來、最初は墳丘の區域を劃する爲、一は封土の流失を防ぐ爲に圓筒を排列したが、それが文化の發展に伴ひ、墓制完成期に於ては實用より裝飾を目的とするに至り、其の墳丘表面裝飾の俗習は我が國民性の自發に起つたものであると。又同章(八)墳丘各型式の起原及び時代に於て、我國特有と云ふべき前方後圓の發生期が金石併用時代迄遡り得るとなし其の一證左として大和の畝傍山の東麓に接したイトケノモリの古墳を挙げられ、猶學界未定説の同墳の發生理由につき諸説として清野謙次郎博士の土壇階層連接説、濱田耕作博士の丘

切斷説。梅原末道氏の前方部祭壇附加説を掲げ是等を評述せられ次に著者の假説として左の如く記されて居る。「然らば前方部は陪葬の爲に出来たかといふと、この部分の出来た最初の動機は後圓部をして奥深く森嚴なる感を與へむが爲の施設と想像される。例へば神社に於て鳥居を潜つてから社殿に至る關係、邸宅に於て門から玄関、或は玄関から奥座敷の關係のようなもので、前方部は後圓部をして奥深からしめんが爲の修飾に起因した日本獨得の型式で、それがやがて陪葬の用にも供せられるやうになつたと想ふのである。これ固より前方後圓模形式の起原を解決し得たと自ら信する底の説ではない。従來三説とも假説として發表されたのであるから、吾輩も亦聊か假説を試みたに過ぎない。」と右は後圓部森嚴説とでも云ふべきもので梅原氏の前方部祭壇附加説と共に有力な説であらう。

第三章石槨及横穴(六)死の思想と横穴式石槨に於て、「横穴式石槨は上古に於て墳墓なる思想中の要素として最重要なる位置を有したと見える。彼の伊弉諾尊が伊弉册尊を夜見の國の即ち死の國に訪問して逃げ歸られた神話は、長い美道と美門を閉塞した大石材に關する思想が自らその中に織り込まれてゐるを思ふべく、天照大神の天岩戸隠れの神話も横穴式石槨の思想が含まれてゐると思はれるし、萬葉集の「岩隱坐」といふ死に對する語も、必しも横穴としなくても岩石を築成せる石槨内に遺骸を葬るところから成立した語であらう。又同章(一九)石槨及び横穴の起原と時代に於て「横穴式は勿論豎穴式石槨さへ外來文化の影響になつたと考へられ、この兩型式に對する思想がどちらが早く輸入されたかが不

明である。……兩型式共古墳時代の末期まで並存したと見るが妥當であらう。」と記され、嘗て學界に於て論議されたこの起原の先後を論ぜられなかつたのは物足りない感がする。

第四章石槨陶棺及壙棺(四)石槨型式の進化に於て、舟形石槨は獨木舟の如き刳抜木棺から進化し我が固有の型式で、長持形石槨は木棺より進化し漢代文化の影響に成立したと見るが妥當であると言はれ、家形石槨が最進歩した新型式であらうとせられ其の三の理由を擧げて論ぜられる。又所謂繩懸突起につきて、最初實用的即ち石槨移動の目的であつたが時代の推移に伴はれて後には往々裝飾的となるに至り、又(四)陶棺に於て、陶棺に高く自立脚の二列或は三列あるは家屋に擬した結果であらう。又上原氏の如く陶棺は或は壙棺から發達し進化したものかも知れないと云はれて居る。

最後の第五章餘論に於ては古墳(一)副葬遺物の概要を記述せられ、それによりて(二)上代文化を觀察論述し又(三)古墳に於ける固有文化と外來文化(四)古墳の分布と隼人及蝦夷等に付きて記され(五)古墳に現れたる地方特色は特に注意すべき條で、九州北部に於て壙棺行れ銅劍の類が使用されたのは大陸文化の影響で大和地方を中心とせる文化圏が未だ十分に此地方に傳播しなかつた時代で、筑後肥後に於ける石人石馬の類も亦支那文化の影響であり、其の古墳には大概埴輪があるから畿内地方と同一文化圏内に更に支那文化的要素が附加されたのである。備前美作地方に陶棺の多いのは其の地方の窯業の盛んなためであり、關東地方の埴輪人馬等の多いのは石器時代に土偶土器を作るに慣れた「アイヌ」族の裔が

大和中心の文化に融合して生活を営む時代に至つて土師部の職業に従事し盛んに埴輪を調製したためであらう、又畿内地方の古墳から實用的石製品の多く発見せられるは此の地方が夙に末開の域を超越して貝器をそのまゝ、使用せずに石製にその名残を留めたるを用ひるに至つたと解すべきである、かくの如く古墳分布區域には夫々地方色はあるが、九州北部に銅鉾銅劍が行はれた金石併用時代の遺跡を除外すれば畢竟大同小異といふべきで、大體から觀察すれば同一文圖にあると稱すべく、而して其の中心的地點は畿内地方であることは多くの學者の肯定するところであると論じ結ばれて居る。最後に(六)古墳と大和朝廷の成立に於て、山陵は總べて畿内地方にあり、畿内は古墳の文化の中心地であるから古墳と陵墓との關係の密接なるは勿論、古墳の發生は大和朝廷の成立と相俟ち、即ち古墳は大和朝廷の搖籃時代に發生したと云ふべく、大和朝廷は古墳の源泉地に成立したと稱すべきであると論述し了つて居る。

以上は本書を一讀し参考となり且つ興味の深かつた處の中二三を記述したのであるが、要するに本書は古墳の構造、石槨、石棺並に副葬品等に就いて簡略に論述せられてあるから考古學に興味を有するものは一度本書を繙くべきである。(武田勝藏)

近畿墓跡考 大阪之部

(鎌田春雄著)
大鏡閣發行

本書は四六版五百三十頁程のものであるが、大阪市内各所に散

在する天正十四年以來慶應末平に至る迄の後世名ある人の墓を調査考證したもので、其收むる處は國學者、儒者、歌人、詩人、俳諧、醫師、志士、義僕又は遊女等に至る迄二百十餘名である。

是等各人の墓に付きては各々所在、形式、刻文、略傳の四項に分つて説明し、先づ「所在」に於ては單に寺院名のみを掲げるのみでは無く其寺院境内の何處の邊にあり、且何の方に面して居るかも記してある。次に「形式」に於て墓石の五輪塔、寶篋塔、位牌形等の何れに屬するやを記し、又其墓石並に臺石の種類寸方等に至る迄詳細に記し猶其碑文の撰者筆者名をも附記してある。次に「刻文」に於ては正面、側面、背面の文字を残す處なく記し、且つ讀み易き様に句讀を施してあるが、若し各々「行」をも明記してあつたならば一層有益であると思はる。次に「略傳」に於ては其の人の事歴の大要を記してある。

猶卷頭には展墓者の便を計つて寺院の位置を知るために其略圖九を掲げ、又巻尾に「墓所檢索」を附し且「掃苔雜錄」と題し墓碑檢索の趣味談を加へ、最後に「忌辰年表」と題し本書に收録した各人名を其没年月日順に列記し猶其歳を附記して便利なるものである。要するに香華を捧ぐる者あと絶えぬは謂ふ迄も無く、其あと絶え苦むした無縁の墓石をも檢索し其の銘を摹寫し、諸書を涉獵して其人の略歴を記述した著者の勞は贅すべきであり、地下に眠れる故人も亦喜ぶ事と思ふ。

本書は吾等の如く墓碑檢索に興味を有する者には缺く可らざる好著であり、著者に今後引續き他の地方の部も蒐集上梓せられる事の一日も早きを望むのである。(武田勝藏)